安谷屋美佐子展

優雅な白い空間

純な芸術的行為に共感

安谷屋美佐子は異色の作家である。絵画でもなく、彫刻でもなく、いわば造形作家としかいいようのない、そうした境界的な仕事をするからである。

安谷屋の無償の制作活動、純な芸術的制作に賛意を表する人は多い。確かに彼女の作るタイプの作品は、今の沖縄では売れない。もともと金にならないことを覚悟で多くの労力と時間と金をつぎ込む。売れないだけではない。彼女の仕事は展示期間が過ぎれば壊される運命にある。写真では残るが、作品としては残らないのである。そういう意味では二重の無償性を担っていることになる。

無償で、純な芸術的行為に共感はするが、そうした在り方と作品の質とは無関係である。心構えが良ければ、作品が良くなるといったものではないし、人の良さで作品が良くなるとは限らない。逆に金を出して手に入れたいほどの立派なものをつくるべきという理論も成り立つ。それにしても、一途に自分の姿勢を貫く態度に筆者は拍手を送りたいとは思う。

前回の個展の作品は、発泡スチロールで覆われた大きな箱状の立体が一つ置かれたものだった。正面に入り口らしい穴があき、中に透ける布で横長の立体が形作られ、それがピンクに輝くように設置されてはいるものの、とりつくしまのない無愛想なものに見えた。

制作意図など聞くと、彼女の目で見、体で感じた、もっともフィットする大きさの立体を作りたかったとのことである。見方としては、正面から相対した方が望ましいとのことだった。とはいうものの、見る側はどうしてもこの立体をぐるっと回って後方や側面から見るし、その無遠慮な存在が気になった。正面から見るにしても、それはそれで中の構造体としての鉄骨がデリケートな雰囲気にそぐわない無骨さを見せていた。

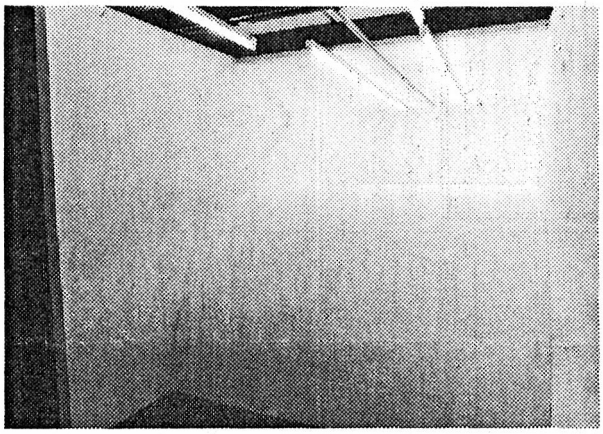
今回の仕事では、こうした欠点を画廊の狭さをうまく生かして払拭した。まず縦長の空間いっぱいに制作した。これで側面や後方からの視角が遮断され、正面からのみ人は相対し、離れて客観視することが出来ない。画廊に入れば、直接的に作品の空間内に取り込まれてしまうのである。

穴はふさがれて、すべては表面のみの仕事となった。内部と外部の複雑な関係は取り払われて、単純に縦から横へと変化する白い面の微妙な動きに変わった。内部の無骨な構造体を見せることなく、作品は無理なく仕上がったのである。

白い面は足元から立ち上がり、カーブしてほぼ目の高さ近くで水平に移行する。壁や天井の白と溶け合って、その奥行きへの距離が測れない。数メートルにも無限の深さにも感じられる。こうして見る人は黙し、しばしこの優雅な白い空間に浸ることになる。

（稲嶺成祚・琉大教授）

同展は画廊「匠」で6日（日）まで。



安谷屋美佐子展から